

マンチェスター大学のプロポーズ



約束の時間に早すぎたので、私はホテルのロビーで待っていた。1987年（昭和62年）3月、IADR開催中のシカゴである。Dick（ミシガン大学のクリスチャンセン歯学部長）が、ぜひ会わせたい人がいると言う。所在なげに立っていると、東洋人は私だけだったので、長身の西洋人が「Dr. ナカハラ？」とにこやかに握手を求めてきた。

彼は、マンチェスター大学のJ.H. ジョーンズと自己紹介した。渡された名刺には、Councilorとあった。やわらかな物腰、端正な風格、明快な語り口、これぞ英国紳士であった。じきにDick、小倉英夫助教授（当時）がみえ、4人でソファを囲んだ。

ひとしきり歓談のあと、前歯学部長というDr. ジョーンズが、貴学と姉妹校の提携をしたい、とまことに率直に申し入れた。その出し抜けのプロポーズに戸惑って、私たちは即答を避けた。

あとで知ったのだが、英国ではPresidentをCouncilorという。マンチェスター大学の学長のプロポーズと知っていたら、否応もなかったろう。マンチェスター大学は、イギリスの北イングランドの名門校で、歯学部はとくに基礎歯科医学の研究に優れ、当時、「イギリスにおける最高の研究能力を有する歯学部」として認定されていた。

私たち一行4名は、5講座ほどの教授から、30分ずつ丁寧に研究の概説をうけた。私には専門的すぎたが、彼らの研究に対する熱意と自信、そのレベル

の高さは十分に理解できた。私がこのようなレクチャアをうけたのは、他にはスイスのチューリッヒ大学だけである。

同年10月15日、市内のマンチェスター市迎賓館の「ブルームクロフト・ハウス」。晚餐のあと、瀟洒なゲストルームにおいて、私たちは姉妹校提携の調印をした。写真は、中央がジョーンズ学長、その左隣にP・J・ホロウェイ歯学部長、左側は小倉助教授。格式ばらず、まことに和やかでフランクな洗練されたセレモニーであった。これが英国流か、と私は感服した。

翌日、地元のマンチェスター新聞の取材をうけた。調印書を胸にして笑え、といわれて、私は大人気なく

愚図った。撮影しながら記者が、マンチェスターの名物は何か知っているかと問う。私たちは口をそろえて、「産業革命！」と答えた。

すると彼はニヤリとして、もう一つあると言う。答えに窮していると、「マンチェスターユナイテッドだよ」と得意気に鼻を鳴らした。当時はまだ日本ではマイナーだったが、サッカーかあと合楯を打った。後年、あのベッカムが出た名門クラブである。

その夜、ホロウェイ歯学部長邸に招かれた。夕宴のあと、暖炉のある居間でくつろいだ。小倉助教授が、折目正しいホロウェイ夫人と談笑をはじめた。宗教の話だったので、私は内心マズいなと思った。異国人との宗教談義は禁物、と教えてくれたのは小倉助教授だ。その議論は白熱し、両者は一步も引かないディベートになった。明らかに夫人は、怒り心頭に達していた。オイオイOGURA君と、私は日本語で小声でたしなめた。招待された先の御夫人を怒らせることはないだろう、小倉！

彼は、べつに悪びれた風もなくケロリとしている。御主人が、裏で夫人をなだめている様子だった。彼女はなんとか玄関まで見送ってくださったが、別れぎわにも固い表情をくずさなかった。

小倉助教授の歯科界随一の語学力を証明する一場面であったが、そのせいで（と私は思っている）、招待してもホロウェイ夫妻が来日することはなかった。翌年7月、私たちはジョーンズ夫妻を迎えた。